

聖書：コリント人への手紙第一 1：18～25

説教題：神の力、神の知恵

日時：2022年1月16日（朝拝）

前回、コリント教会には分派の問題があったことが述べられました。「私はパウロにつく」「私はアポロに」「私はケファに」「私はキリストに」と（12節）。そして4章6節にあった通り、彼らは一方にくみし、他方に反対して思い上がっていました。自分のお気に入りのリーダーを高く上げるためにそちらにくみし、他のリーダーに反対する。そして自分が支持するリーダーが高く上げられることによって、自分もこの世界で高いステータスを持つクリスチャンになりたい。優れたグループに属する優れた信仰者でありたい。そのために一方では他者を見下して優越感を持ち、一方では他の者を妬む。教会がこのような状態になっては壊れてしまいます。このようなコリント教会の争いに関係していたのが17節で見た「ことばの知恵」でした。コリントはギリシャの大都市であり、そこでは雄弁術や知恵の言葉が高く評価されました。その当時の文化のただ中であって、コリントのクリスチャンたちもいかにその人は立派に見えるか、頼もしく雄弁に話せるか、世の知識人たちに負けずに十分張り合える人か、に多くの関心を注いでいました。しかしパウロは17節で自分に与えられた使命は、「ことばの知恵によらずに」福音を宣べ伝えることだと言いました。それは「キリストの十字架が空しくならないようにするため」であると。言い換えれば、ことばの知恵によって福音を語ろうとするとキリストの十字架が空しくされるということです。この両者は両立しない。さらに言い換えれば、これは「この世の知恵」と「神の知恵」はぶつかるということです。それがはっきり現れる点としてキリストの十字架があるということです。

18節に「十字架のことばは、滅びる者たちには愚かであっても、救われる私たちには神の力です」とあります。十字架のメッセージは人々を二分します。ある人たちにとって十字架の話は愚かです。ばかばかしい話、取り上げるにも値しない話、傾聴に値しない話、いや聞きたくもないし、関わりたくない話。そのように考える人は「滅びる人たち」であると言われています。これは現在形で書かれていますから、滅びつつある人たち、そのままでは最終的な滅びに至る人たちということになります。一方、ある人々にとって十字架のことばは神の力と言われています。こちらは救われる者たちです。ここで「力」と言われていることには意味があります。すなわち十字架のメ

ッセージは単なる素晴らしい話ではない。それは救われる者たちの内に働く神の力で、その人たちに救いを得させる力です。神がそこに生きて働きます。このように十字架を巡って「この世の知恵」と「神の知恵」は決定的にぶつかります。

こう述べてパウロはまずこの世の知恵について語ります。この世の知恵は自分たちこそ賢いと考えて十字架を蔑みます。これを愚かなもの、くだらない話と断じます。しかしそういうこの世の知恵は神に退けられるということが19節に言われます。「『わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、悟りある者の悟りを消し去る』と書いてあるからです。」これはイザヤ書29章14節からの引用です。つまりパウロが今述べていることは彼が突然言い出したことではない。それは旧約時代から言われて来ました。人間がいくら自分の知恵を誇っても神の知恵に比べたら、はるかに及ばないのは当然です。イザヤ書55章8～9節：「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、あなたがたの道は、わたしの道と異なるからだ。——主のことば——天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。」これに加えて人間は罪に落ちたことによって、その考え方、ものの見方において決定的な罪の影響を被る者となりました。ローマ人への手紙1章21節：「彼らは神を知っていながら、神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなったのです。」ここに「その思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなった」とありますように、人間は本来与えられていた光を墮落によって大いに失い、今や物事を正しく受け止めることができない者、むしろ捻じ曲げて解釈する者となってしまいました。そんな状態にある人間がいくら自分の賢さを誇っても、それは一体どれだけのものと言うべきでしょうか。そういう人間の知恵や雄弁さ、ことばの巧みさは、誇るに値するものでしょうか。

20節でパウロは「知恵ある者はどこにいるのですか。学者はどこにいるのですか。この世の論客はどこにいるのですか。」と問います。これらはそれぞれ、ギリシャの哲学教師、ユダヤの律法学者、そして3つ目は両方を含む人たちと言われたりしますが、パウロはこれらによってこの世の知恵を代表する人たちの言い表しているのでしょう。そして言います。「神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。」パウロはここで知恵と呼ばれるものすべてを否定しているわけではありません。「この世の」という言葉がついていますように、それは神から離れ、神に敵対しているこの世の知恵のことです。そのこの世の知恵を神が愚かなものにしたとはどういう意味

でしょうか。それはこの世の知恵がいくら何かを考え、語ったとしても、救いに到達することはなかった、真の益には至らなかったということです。具体的には次の 21 節で述べられます。そこに二つのことが言われています。

一つ目は 21 節前半です。「神の知恵により、この世は自分の知恵によって神を知ることがありませんでした。」 先ほど参照したローマ書 1 章 21 節の続きの 22～23 節にこうあります。「彼らは、自分たちは知者であると主張しながら愚かになり、朽ちない神の栄光を、朽ちる人間や、鳥、獣、這うものに似たかたちと替えてしまいました。」 また 25 節：「彼らは神の真理を偽りと取り替え、造り主の代わりに、造られた物を拝み、これに仕えました。」 人間は自分の賢さを誇り、自分の知恵で神あるいは神に相当するものを見出そうとしますが、それに行き着きませんでした。自分たちの頭で考えられる範囲でだけ考えるため、結局はこの世にあるものの何かに自分の願望を投影して、それを神に見立て、神に仕立て、それを拝むだけです。こうして結局、人間の知恵では神に到達し、神と交わって生きることには至りませんでした。これは「神の知恵による」と言われています。神はこうしてこの世の知恵の限界を明らかにし、この世の知恵が愚かであることを示しているということです。

二つ目は 21 節後半です。「それゆえ神は、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救うことにされたのです。」 ここにあるのは神の方法と人間の方法との食い違いです。宣教のことばとは、18 節に出て来た十字架のことばの宣教のことです。これが「愚かさ」と言われているのは、これが人間には愚かに見えるということです。19 節に「十字架のことばは、滅びる者たちには愚かであっても」と言われた通りです。しかし神はこの世の知恵が愚かと断じる十字架のことばの宣教を通して、信じる者を救うようにされました。人間にはまさかと思われる方法、人間には思いよらない方法で救いのわざを進められるところに、この世の知恵にはるかに勝る神の知恵が示されています。その神の知恵に基づく方法を愚かと断定するところにこの世の知恵の非常な愚かさが露呈されているのです。

こうして示された神の知恵に対して人々はどう応答したでしょう。22 節に「ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシア人は知恵を追求します。」とあります。確かにユダヤ人はしょっちゅう、しるしを求めたことが聖書に示されています。マタイの福音書 16 章 1 節：「パリサイ人たちやサドカイ人たちが、イエスを試そうと近づいて来て、天から

のしるしを見せてほしいと求めた。」 しるしとは、欄外に注釈がありますように「証拠としての奇跡」という意味です。あなたが本当に神なら、あるいは救い主なら、その証拠を示して見せよ！という要求です。その証拠を示すことができたら信じるから、と。この態度には大きな問題があります。それは人間の方が上になっているということです。人間が試験官になっています。自分のあり方は一切問わず、ただ神を一方向的にテストしようとします。しかもその判断基準は人間が勝手に設定したものです。ユダヤ人が期待したのは偉大なメシヤの姿でした。人々を圧倒する力を持ち、それを見せつけることができ、きらびやかで、勝利に輝くメシヤ。世界の国々の上に自分たちを高く上げてくれるメシヤ。そんな彼らにとって、十字架につけられたキリストはつまずきでしかありません。申命記 21 章 23 節：「木にかけられた者は神にのろわれた者だからである。」 こんな弱々しい人、呪いの木にかけられた人が救い主であるはずはない！そのように考えてつまずき、拒絶しました。

一方、「ギリシア人は知恵を追求する」とあります。彼らは知的であること、理性的であること、合理的であること、その考えが明晰であることを求め、評価しました。そんな彼らにとって十字架につけられたキリストなど全くのナンセンス、愚の骨頂です。第一神がこの世と関わり、この世で死ぬなんてことはあり得ない。処刑されたあのイエスが神であるなどという主張は全く聞くに堪えない話でしかない。なぜこんな愚かな話に関わらなければならないのか。我々が求める知恵とは何の関係もない。そのように見下して拒絶する。

しかしパウロは言います。24 節：「ユダヤ人であってもギリシア人であっても、召された者たちにとっては、神の力、神の知恵であるキリストです。」 21 節で「信じる者」と表現された救われる者たちが、ここでは「召された者たち」と言われます。救いはただ神の恵みによることを示すためでしょう。その者たちにとってはキリストは神の力、神の知恵なる方であると言われます。「神の力」については 18 節にも出て来ました。十字架につけられたキリストと、その十字架を伝える言葉は、召された者・信じる者には「神の力」です。単なるお話ではありません。罪人を実際に罪から解放し、その罪を赦し、神との正しい関係へと導き、神の子どもとしての身分を与え、やがての完全な救い・栄光の状態に向かって日々造り変えるみわざに実際に私たちを生かす力です。生き生きと働く力です。またそれは神の知恵でもあります。まさかこのような形で罪人を救い、やがての栄光へ導き入れてくださるとは誰もが考えても見

なかったことでした。この世が思いつきもしなかったことでした。そこにこの世の知恵の裏をかいて事を実現する、この世の知恵にはるかに勝る神の知恵が示されています。ですから最後の 25 節に「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです」とあります。「神の愚かさ」とは、この神の方法が人には愚かに見えるということです。同様に「神の弱さ」とは、人にはそう見えるということです。しかしそのように人には愚かと見られ、弱々しいと見下される神の知恵こそ、実際には人よりはるかに賢く、また人よりはるかに強いということです。

以上のことから 2 つのことを最後に述べたいと思います。一つは、私たちは「この世の知恵」と「神の知恵」のどっちに立って歩むのかということです。パウロはここで一般的な話をしているわけではありません。念頭にあるのはコリント教会の分派の問題です。そして今日の話から分かることは何でしょうか。パウロの言葉が暗示しているのは、コリント人たちは神の知恵よりもこの世の知恵を重んじていたということです。周りの異教社会の価値観を教会の中に持ち込んでいたということです。この世の人々が賞賛する雄弁術、あるいはその話しぶりの巧みさ、流麗さ、あるいはその自信に満ちたポーズ、等々。そういった基準で、あの人はすごい、この人はすごくない、などと争っていた。そんな彼らにパウロはここで、この世の知恵は自分を誇っているけれども、それは単なる幻想・錯覚にしか過ぎないと言っているわけです。自分で自分を本当に賢いと思っているかもしれないが、それはただ自分がそう思い込んでいるだけ。そして空しく高ぶっているだけ。結局それは自分たちを救いません。神はそういうこの世の知恵を退けています。そして何と言っても、神がその知恵によって与えている唯一の福音、十字架の福音を愚かであると断じているところに、この世の知恵の愚かさが致命的にさらけ出されています。ですからそういうこの世の知恵ではなく、神の力であり神の知恵であるキリストの十字架にこそしっかり立つように！と勧められているわけです。十字架の福音に立つなら誇れる人は誰もいません。自分には何もないことを告白して、ただ十字架の前に憐れみを請い、神がくださる救いを感謝して受け取るだけです。その人はその後で、誰が優れているかと論じ合って、そのことで他の人と争い、またそれによって自分もさらに高みに達しようなどとは思いません。その人はただキリストにこそすべての栄光を帰し、そのキリストに喜ばれる生活をしようとしします。コリント人たちの誤りは十字架の福音から離れて、この世の価値観に基づく勝利主義、あるいは成功主義に立ってしまっていたことです。その解決は十字架の福音に戻ることです。私たちも同様に十字架の福音に立ち戻るところから、正し

い教会生活を導かれないと思います。

そして2つ目のこととは、私たちが神の知恵に立って歩もうとするなら必ず世から蔑まれるということです。十字架のことばはある人々にとっては愚かだと言われました。ですからこれを伝える私たちは人々から愚かだと思われ、バカにされるということを最初から覚悟していなければなりません。私たちは人間的には周りの人々から蔑まれないとは思いません。そんな私たちにとっての誘惑は人々がつまずくこと、愚かだと思ふことを薄めることです。十字架のメッセージ、罪のメッセージをあまり語らない。それよりも人々に受け入れられやすく、みんながいいね！と言ってくれそうなことだけを伝える。いわばこの世の知恵に迎合する。しかし21節で「神は、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救うことにされた」と言われていることを私たちは心に留めていなければならないと思います。「愚かさを通して」とあるのですから、世から愚かだと思われることは避けられないのです。それを嫌がってはいけません。むしろ心に覚えているべきは、世はそう思うかもしれないが、ここにこそ真の神の知恵があるということです。世が愚かと断じる十字架につけられたキリストこそ神の力、神の知恵です。私たちはこれを脇に押しやっ、この世受けが良いことを語るのではなく、十字架につけられたキリストこそを感謝し、尊び、この神の知恵こそを誇る歩みに進みたいと思います。そしてこの十字架のことばを通して、神の力と知恵がさらにこの世に豊かに現わされて、人々の上に真の祝福が拡がり、神に栄光が帰されるために仕える者へ導かれないと思います。